

記録的な大雨や猛暑、初めて聞いた『ガストフロント』と、温暖化の影響と思われる異常気象が続いていますが、会員の皆様はいかがお過ごしでしょうか。

8月号の表紙を飾ったのは琉大病院第一外科、西巻正教授のまさに夏といったヒマワリの写真です。『太陽の眷属』のタイトルに相応しい、青と黄色の強烈なコントラストは本当に見事なものです。

都道府県医師会勤務医担当理事連絡協議会について城間寛理事から報告されました。

新専門医制度及び地域医療構想が議論される中で、勤務医の地域医師会活動への積極的な参画が望まれており、私のような勤務医も地域医師会と一丸となって地域医療に貢献しないといけないのだと感じました。

安里哲好会長から第1回都道府県医師会長協議会、九州各県保健医療福祉主管部長・医師会長合同会議について報告されています。両会で新専門医制度についての議事があり、今後の専門医制度の地域医療への影響が気になるところです。

宮里善次副会長から、第1回地区医師会長会議、沖縄県・沖縄県医師会連絡会議について報告がありました。医療機関を受診する外国人観光客が急増し、「言葉の問題」と「未収金の問題」は大きな問題であり、国際観光立県を県策の大きな柱としている沖縄県としての早急な対策が必要と感じました。

上田裕一先生旭日双光章受章祝賀会および新・旧琉球大学医学部長激励会が合同開催され、楽しそうな写真が掲載されていますが、全国に先駆けて医療情報システムの導入にご尽力いただいた上田裕一先生はさぞかし大変だったことと思いました。松下正之先生の御尽力のおかげで、後輩たちの国家試験合格率は見事にアップしました。大変お疲れ様でした。石田肇先生には西普天間への移転計画をはじめ、多くの課題が山積していることとは思いますが、ますますの琉球大学医学部の発展のため、よろしくお願ひいたします。

生涯教育のコーナーでは、中頭病院小児科の栗田愛里先生に川崎病について執筆していただきました。未だに原因不明な疾患ではあるが、早期に診断し、適切な治療を行うことにより、冠動脈瘤の発症が抑えられることが16年間の自験例で報告されています。循環器内科医師として非常に勉強になりました。

プライマリーケアのコーナーでは、アワセ第一病院の浜端宏英先生に流行性耳下腺炎について御執筆していただきました。小児のみならず成人例も散見され、また、再感染やワクチン後の罹患など解明すべき課題も多い、古くて新しいそして悩ましい疾患であると締め括っています。まさにそんな疾患だと実感しています。

インタビューコーナーには琉球大学医学部長に御就任した石田肇先生に御登場いただきました。西普天間への移転計画は最大の課題ですが、我々、卒業生も大きな期待を抱いております。御活躍を祈念しております。

緑陰随筆では

猪本利雄先生は、お母様からの愛情、奥様への愛情、そして女性の下の顔への愛情を感じ、感銘いた

しました。

長田清先生は「時を馳ける」とだいて、時間に対しての不思議な感覚を表現しています。時間は考え方でどうにもなりそうな気がしてきました。

運天啓一先生の愛犬とカラスと飼い主の奇妙な共同生活は非常に面白く、心地よい素敵随筆でした。湧田森明先生の「スマッシュを決めてコロリ！」とは、とても素晴らしい老いへの挑戦であり、50歳になった私もまだまだ頑張らなくては、と感じました。

高宮城敦先生の沖縄のカナブンの話は、医師だからこそ気づいた発想だったのではないのでしょうか。論文まで書かれたとは驚きです。

田中由香子先生のおろしあ探訪記ですが、ロシアという国は未知の地であり、全く想像ができませんが、是非行ってみたいくなりました。

涌波満先生の随筆「50回忌の出会い」はまさに『Sequence of Events、偶然の重なり』であり、とても神秘的でとても素敵な気分になりました。

渡辺信幸先生のアンダカシーの話は内科医として非常に興味深く拝読しました。ハワイから550頭の豚を運んだ方々に感謝せずにはられません。

神山琢郎先生のゴールデンウィークの家族旅行は、なんとも美味しそうな御旅行です。私の出身の群馬県の伊香保温泉の料理は今ひとつだったみたいです。ザンネン。

嘉陽宗亨先生が書かれているように、今の新都心のあたりには私が学生の時はまだなにもなかったことを思い出しました。

平良清人先生は同級生である金城忠嗣先生の随筆「ケトン体が人類を救う」を読んだ皮膚科的な視点からのお考えを述べ、非常に興味深く拝読しました。

嘉陽真美先生の随筆には、慶留間島の魅力が満載でした。離島でのんびりとゆったりした時間を過ごしたい気分になりました。

池宮城梢先生にお願いして500gで24,980円のマヌカハニーを味見してみたいくなりました。

涌田健一郎先生のサーフィンの写真はまさにプロ並みに見えます。健康的で興味が湧いてきましたが、やっぱり50歳過ぎからでは無理でしょうか。

石川裕子先生は沖縄で過ごした10年間について書かれています。沖縄は私にとっても第二の故郷です。

栗澤剛先生は「やっぱり皮膚科はおもしろい」と題して皮膚科疾患の診断の面白さを伝えていただきました。内科でも皮膚症状が決め手となる疾患もあり、ぜひ講義をしてもらおうと考えています。

知念行子先生のあーちゃまおばあさまが、88歳の時に元気が無くなった際に家族が一生懸命引っ張り回すことで元気になったことが、まさにフレイル対策になったのだと興味深く拝読しました。

新専門医制度、地域医療構想など大きな課題も山積しているようですが、緑陰随筆を読んで、まったりとした時間を過ごしていただくのもよろしいかと思いました。

まだまだ猛暑が続きますが、ご自愛ください。

広報委員 問仁田 守